

今朝から、使徒言行録が始まります。ルカによる福音書が始まった時と同じように、信仰の原点に立ち返りましょう。私たちの与えられている「信仰」に、実際に仕え、語り継いでゆく時、いよいよ豊かに、その救いは証しされてゆくのです。

証しを書き留めよう（選ばれた者として）

今朝の箇所、使徒たちは「イエスに選ばれた人たち」と呼ばれています。スカウトされることは、嬉しいことでしょう。しかし、選ばれたということ、単純に受動的な態度だけで受け取ると、必ず行き詰まりを感じる時がやってきます。それを突破していくのは、「こんな者でも愛されて、用いられる」という本当の謙遜さでしょう。

その愛を知る手がかりは、自分の歩みの中に証しを見つけることです。洗礼を受けたことや、誰かを導いたことだけが、証しではありません。前から知っているみことばに、新しい喜びを感じたことや、小さな心配に神様が応えてくださったことなど、見逃している、気に留めていない毎日の中に、神様が働いておられることを見つけることです。

実際にやってみると、結構骨の折れる作業で、あまり効果も感じないかもしれません。しかし、それは神様の愛から遠ざけたいサタンの誘惑です。ここから得られる恵みは、計り知れません。1日の終わり、一週間の終わり、一年の終わりに、この証しを書き留めておこなら、私たちは、どんなときでも「私は神に愛されている」という揺るぎない救いを、確信する者に成長させていただくことができるのです。

迫害の中でも喜ぼう（テオフィロのように）

送り主「テオフィロ」については、何も手がかりがありません。キリスト教に改宗した、ローマ帝国の高官というのが定説です。「テオ」は「神」、「フィロス」は「友」あるいは「愛された人」という意味です。迫害を避けるため、通称名だったのかもしれませんが。高山右近や細川ガラシャといった、キリシタンたち、またホーリネスの先達は、迫害を受けました。宗教弾圧と聞くと、どこか、遠い世界の出来事に思うかもしれませんが。しかし実は、信仰の世界において、「迫害の中にも喜んで歩む」ということは、すべてのクリスチャンに実は共通で備えられた上級者向けトピックなのです。

それは、私たちの信仰の到達点、何者にも奪うことのできない、圧倒的な喜びであるということを証ししています。そこに辿り着くために、私たちが、歩み続けることを、今朝、示されているのです。

使徒言行録は巻末が閉じられていない、と言われます。それは、今を生きる私たちの姿が、常にこの物語につながっている、という意味です。京都復興教会の教会形成最終年「奉仕」もあと3ヶ月足らずです。平凡な日常の中に、証しを書き残しましょう。あなたにしかできない、神様のわざが進むかどうか、その決断にかかっています。